『総合政策論叢』第12号（2006年10月）
島根県立大学 総合政策学会

＜研究ノート＞

島根県立大学における留学生に対する日本語教育について[1)]

犬塚　優司
野上　明子
佐藤　りえこ
井浦　伊知郎

はじめに
1．総合政策学部の外国人留学生に対する日本語教育
(1)これまでの経緯
(2)総合政策学部の日本語教育の目的
(3)入学前日本語研修
1)アカデミック・ジャパニーズ
2)聴解・読解
3)文法・会話
4)日本の文化
(4)1、2年生に対して行われている留学生日本語
1)アカデミック・ジャパニーズ
2)文法・会話
2．大学院の外国人留学生に対する日本語教育
(1)大学院の日本語教育の目的
(2)大学院の日本語教育の実践
1)読解・作文
2)文法・語彙
3．課題
終わりに

はじめに

島根県立大学[2)]には、総合政策学部、大学院開発研究科（修士課程）及び大学院北東アジア研究科（博士課程）に外国人留学生がおり[3)]、彼らに対して日本語教育が実施されている[4)]。本稿では、総合政策学部と大学院で行われている日本語教育について、それぞれその現状を報告し、その問題点を検討する。

本稿は、教育・学習に関する研究であるが、教育・学習に関する研究については、その科学性に疑問を持つ向きもある。しかし、平高史也（2002）は、「さまざまな問題を発見し、

それを解決するというプロセスを重ねることによって、科学としての抽象度を高めていくというアプローチもあり得る」と主張し、「外国語教育のような領域に求められている科学性は『現実に即した問題』(lebenspraktische Probleme）の解決に寄与できるかどうかという、いわば応用性にある（pp. 56–57)」と述べている。したがって、本稿は、本学総合政策学部と大学院において、外国人留学生に対していかに効果的に日本語教育を行うかという問題に対する、一つの解決法を示すものである。

1．総合政策学部の外国人留学生に対する日本語教育

総合政策学部においては、入学前の留学生に対して２、３月に実施される「入学前日本語研修」と１、２年生に対して行われている日本語の補講である「留学生日本語」の二つのプログラムが用意されている。「留学生日本語」は、本学外国人教員により実施されている授業と学外の日本語講師により実施されている授業の二種類の授業がある[5)]。

(1)これまでの経緯[6)]

本学総合政策学部では、開学した2000年４月より、島根県と交流協定を結んでいる中華人民共和国吉林省及び大韓民国慶尚北道からの留学生を受け入れている。また、2002年４月より中華人民共和国寧夏回族自治区からの留学生[7)] を受け入れている。交流県留学生の受け入れに関して、交流県留学生は出身国で日本語を習得し、本学に入学することになっている[8)]。

しかし、2000年度入学の交流県留学生の入学時の日本語能力は、本学の授業を十分に理解するレベルに達してはおらず、当初用意されていた本学の外国人教員による「留学生日本語」の授業では不十分であると考えられた。

そこで、2001年度入学の交流県留学生に対しては入学前の１月に来日させ、「入学前日本語研修」を11週間実施した[9)]。2001年４月以降、本学の外国人教員による「留学生日本語」に加え、新たに１、２年生を対象として、日本語講師による「留学生日本語」が実施された。春学期は一週間に６時間、秋学期は一週間に４時間実施され、留学生の日本語能力の充実に努めた。

2002年度以降入学の交流県留学生についても、「入学前日本語研修」と「留学生日本語」が実施された。「入学前日本語研修」については、2002年春は、２月12日から６週間[10)]、2003年春は、2003年２月12日より６週間[11)]、2004年春は、2004年２月16日より６週間、2005年春は、2005年２月16日より６週間、2006年春は、2006年２月16日より５週間実施された。日本語講師による「留学生日本語」は、2001年度同様、春学期は一週間に６時間、秋学期は一週間に４時間実施された。

(2)総合政策学部の日本語教育の目的[12)]

本学総合政策学部の日本語教育は、「島根県立大学総合政策学部で学ぶための日本語能力の習得」を目的としているところにある。すなわち、「島根県立大学総合政策学部で円滑に学修、研究を進めていくことができるようにする」ことを目的としているのである。

この目的を達成するために、留学生に次の四項の能力・知識を習得させなければならない。

①日本での生活に必要な日本語能力

②大学の授業を履修するために必要な日本語能力

③日本の文化、社会に関する一般的な常識

④社会科学を学修・研究する上で必要な基礎知識

ただし、①については、出身国で習得されていることが期待される。

本学の授業は、外国語の授業を除き、原則として日本語で実施されている。そのため、授業における日本語を聞き取る能力はどうしても必要となる。また、少人数によるゼミ形式の演習が各学年に配当されている。ゼミ形式の授業は、未経験者にとって、授業そのものをイメージすることすら難しいことから、特に、口頭発表を行うための技能の養成が必要になってくる。②の「大学の授業を履修するために必要な日本語能力」とは、具体的には、ノートをとりながら講義を聞く、レポートを書いたりゼミで発表したりするために文献を探す、講義やゼミで発言・発表をする、質疑応答する、などのために必要な日本語能力のことと考える。

留学生が学ぶ本学総合政策学部の「教育課程の中核をなす」基幹科目においては、「社会科学を構成する基礎的な理論と現代社会の特徴である多様性、相対性の認識に立脚して、諸科学を総合する政策原理及び各種政策理論における具体的な政策手法を学習していく」ことになっている。このように、本学部は社会科学を中心に学んでいく学部である。したがって、受講生は③、④を身につけておくことが必要となると考えられる。

しかし、日本語教育において、社会科学の知識を教授するのは、学部での学修・研究において、不必要な先入主を植え付けることになるという考え方もある。また、「社会科学を学習・研究する上で必要な基礎知識」とは何かを、明確に示すことは大変難しい。この点は学部内の専門教育を行う教員の理解と協力が必要であり、日本語教育担当者だけで検討すべきことではないと考えられる。したがって、④については、入学後学部の専門教育の中で、専門教育を担当する教員により教授されるものと考え、当分の間は、本学総合政策学部の日本語教育において習得を目指す知識から外している。

(3)入学前日本語研修

入学前日本語研修においては、先に述べた①、②、③の能力を高めるために、次の四つの授業科目を中心にプログラムを進めている。本稿では、2005年春の研修をもとに説明する。

1．アカデミック・ジャパニーズ	80時間[13]
2．聴解・読解	46時間
3．文法・会話	52時間
4．日本の文化	6時間
合　計	184時間

2005年春は、中国人留学生３名、韓国人留学生２名を対象に実施された。「アカデミック・ジャパニーズ」は、佐藤りえこが担当し、「聴解・読解」は井浦伊知郎が担当し、「文法・会話」は野上明子が担当した。「日本の文化」については、本学の小林博教授、村井洋教授、井上厚史教授が担当した。

1)アカデミック・ジャパニーズ

「アカデミック・ジャパニーズ」は、先に述べた②大学の授業を履修するために必要な日本語能力を習得させることを目的とする。また、授業において日本の文化、社会に関する内容を教材として用いることにより、③日本の文化、社会に関する一般的な常識の習得

をあわせて目指すものである。

a．到達目標

大学での研究活動に必要な日本語力、すなわちアカデミック・スキル[14]には、「思考力・判断力」、「資料収集力・分析力」および「発表力・論文記述力」などがある。入学前日本語研修ではその目標の設定にあたり、大学におけるゼミ形式の授業[15]に参加した経験が受講生にはないという点を考慮し、ゼミ等の発表会で口頭発表を行う能力、すなわち、発表力の習得をその到達目標とした。そのため、研修期間中にゼミを模した発表会を実施することにした。

b．実践内容

研修期間を前半と後半に分け、発表会に向けた準備を行った。発表会では、担当を決め文献を読んでいく輪読型のゼミを模し、担当箇所を要約し、さらに関連する情報を収集・整理して発表することにした。テキストとしては、安田睦彦『お墓がないと死ねませんか』（岩波ブックレット NO. 262）（1992年、岩波書店）[16]を使用した。

ｱ．研修の前半：テキストを分析的に読む練習をする。

テキストの正確な理解と分析的な読解方法の習得のために、授業で全員でテキストを読み進めることにした。テキストを速読し、短時間で中心となる情報を伝える文、すなわち中心文やキーワードを抜き出すという分析的な読解作業が繰り返し行なわれた。また、レジュメ作成のために、抜き出した中心文をさらに短くし、名詞で終わる形や箇条書きにする練習をした。

テキストを読む傍ら、インターネットを利用して新聞記事や世論調査のほか、ホームページからテーマに関連する情報を集めた。このほか日本の葬送に関する一般的な知識を得るために大学の近隣にある神正寺と葬儀場「典礼閣」を見学した。

ｲ．研修の後半：レジュメ・発表原稿を作成する。

口頭発表の技術を学ぶ授業では次の２冊を教材として使用した。

産能短期大学『研究発表の方法――留学生と日本人学生のためのレポート作成・口頭発表の準備の手引き』（2001年、凡人社、pp. 11−47，pp. 118−125）

ピロッタ丸山他『留学生のための大学の授業へのパスポート』（2000年、凡人社、pp. 53−62）

受講生は発表するテーマをいくつかのグループにまとめ、発表順に配列するアウトラインを作った。このアウトラインを基に、レジュメを作成した。レジュメの作成には、かなりの時間が費やされた。どの発表も取り上げるテーマが多く、発表時間を超過することが予測されたため、テーマの絞り込みを指導した。また、テキストや資料から長い文章をそのままレジュメに引用した者や、箇条書きにする際に文法的に間違った者などがおり、個別にレジュメの内容を添削し、書き方を指導した。

レジュメの作成と並行して、受講生に発表原稿を書かせた。本来、発表原稿は必須のものではないが、口頭発表の経験のない受講生のために、発表原稿の作成方法も指導した。テキストや資料は書き言葉や「だ・である」体であるが、発表原稿は「です・ます」の丁寧な文体にする必要がある。しかしながら、受講生には文体の違いが認識されておらず、原稿を何度も書き直さなければならない者もいた。

ｳ．発表会

一人20分の発表を行った。受講生の発表題目は、「初の自然葬と最近の自然葬の実施状況」、「火葬による大気汚染」、「都市部の墓地不足」、「『再生の森』の活動と自然環境保護について」、「散骨を肯定するかどうか」である。発表会には研修担当講師２名のほか、大学関係者４名、先輩留学生３名、日本人チューター[17] ３名が参加した。各発表の後で、講師から発表の進め方、レジュメの書き方などについて、問題点や改善点が指摘された。その後、参加学生が発表内容に関して質問をし、レジュメの書き方や発表の構成についてアドバイスを行った。

ｃ．評価と課題

口頭発表の技術のうち、レジュメ・発表原稿の作成方法や発表の準備の進め方は、おおむね受講生に理解されていることが観察された。特に、レジュメと発表原稿で文体を適切に使い分けられるようになっていた。また、フォントを使い分ける、レイアウトを考える、図表にキャプションをつけるなど、レジュメを読みやすいものにする工夫をした受講生も見られ、口頭発表におけるレジュメの役割が意識化されていることが分かった。

メディアセンター[18] での文献検索や教室でのインターネットを利用した実習から判断すると、情報の収集方法に関してどの受講生も実践できる能力を得ていた。自分が取り上げたテーマに即し、聞き手の理解を助けるような資料の収集に心がけた受講生がいたことは評価される。ただし、ホームページの情報はほとんど検討されずに使われていたことから、収集した資料は必ず分析・検討しなければならないことを受講生に認識させる必要がある[19]。

一方、発表力を質疑応答など討論する力を含むものと見なすなら、討論に必要な日本語の運用能力の習得は不十分であった。それは、受講生の中には、質問に答えるときの表現を知らないため答えられない者、聴解力が十分でないため質問そのものが聞き取れない者がいたからである。また、テキストを分析的に読む作業においても、テキストの誤読や、論の展開が分からないなど、読解力そのものに問題がある者、要約の方法がわからない者がいることが明らかになった。以上のことから、討論を行うために必要な日本語の運用能力、テキストを正確に読むための思考力・分析力など総合的なアカデミック・スキルの習得が、入学後の課題になると言える。

２）聴解・読解

「聴解・読解」は、同じく②大学の授業を履修するために必要な日本語能力を習得させることを目的とする。日本語で行われている授業の内容を的確に聴き取り、必要な箇所をノートする能力を養成するとともに、日本語の文献資料などから必要な情報を抽出する能力を養成している。

ａ．到達目標

初めて大学教育を受ける留学生を対象に、まず大学における通常の講義を聴き取り、そのポイントをつかめるようになること、また、与えられた日本語の論文を読んで、学術的な文章に特有の構造を把握し、理解した内容を日本語で再構成できることを目指した。

ｂ．実践内容

割り当てられた授業時間のうち、約三分の一を聴解に、残り約三分の二をテキスト読解にあてた。

聴解の教材として、中上級用である宮城幸枝他『毎日の聞きとり plus 40』（上下）（2003

年、凡人社）を使用した。テキストの中から日常生活を題材にした文章、あるいは会話を収録した課を選び、留学生の基本的な聴解能力を確認した。その上で、より個別的な話題を扱うものへ移行するようにした。CD を繰り返し聴かせ、テキストの練習問題を解きながら、内容を短い文でまとめる作業を行った。その後、録音内容の全文を各自に配布し、音読させて発音の不正確なところを修正し、文法の重要点も指摘するようにした。この際に取り上げる文法項目については、野上明子の「文法・会話」の授業で扱われた話題と連動するよう、可能な限り心がけた。

上記テキストは基本的な内容を幅広くカバーしたものだが、練習問題が少なく、また大学生活で遭遇するような込み入った題材に乏しかった。そこで、より「アカデミック・ジャパニーズ」に特化された教材として、佐々木瑞恵、岳肩志江『予測して読む聴読解』（2001年、アルク）を併用した。こちらは全体的に内容が高度であるため、細部の解説は控えめにし、文章の一部から続きを予測させるなど、文脈から全体をつかむための訓練を中心とした。

一方、読解の教材にはアカデミックジャパニーズ研究会『大学・大学院留学生の日本語①読解編』（2001年、アルク）を主に用いたが、必要に応じて同シリーズのアカデミックジャパニーズ研究会『大学・大学院留学生の日本語③論文読解編』（2002年、アルク）も利用した。共に論文読解専用のテキストだが、前者に比べて後者の方が一課あたりの分量も多く、内容も複雑で、グラフや表などを読む力も必要とされるような構成になっている。この二冊から数課を選び、全員で輪読しながら、発音や文法を解説する形で授業を進めた。「アカデミック・ジャパニーズ」の授業とは異なり、速読を第一の目標とはせず、論文特有の言い回しなど細部について丁寧に解説し、例文作成の練習も時間をかけて繰り返し行った。

また、時には新聞記事やテレビのニュース、ドラマなどの録画映像を見せ、その内容について理解できるかどうか確かめることも試みた。

c．評価と課題

受講生の経歴を見ると、大学での授業自体初めてという者が多く、日本語で専門的な文章を読むことにも慣れていない場合が殆どだったため、読解のための時間を設けて訓練を行ったことは有意義だった。特に、読んでいる文の内容は理解できても、それを日常会話のレベルでなく、学術的なやりとりにふさわしい語彙で再構成し、表現することには不得手であるという者が多く見られた。ここ数年の留学生のレベルの推移を見る限り、こうした入学前研修を行なわなかった場合、大学での学習・研究生活に充分適応できない留学生が取り残されてしまう可能性も無視できない。今後も読解授業では、全体像をつかむ一方、細かな表現の問題にも注意を払うべきと考える。聴解の場合、教室内での短い質疑のやりとりには問題ないように見える学生でも、まとまった内容を聴き取ることになると不得手な場合が少なくなかった。さらに、中国と韓国の留学生が、漢字の読み書きやカタカナ語でつまずく場面が多々見られた。今後は、漢字や外来語にも一定程度の時間を割く必要があると思われる。

3）文法・会話

「文法・会話」は、①日本での生活に必要な日本語能力の拡充を目指すものである。この能力は出身国での習得が期待されているが、現実に来日した外国人留学生の状況から見

て、日本での生活実践に密着した言語能力を更に高める必要があると考えるためである。

a．到達目標

会話の授業では、日本での生活に必要なより実践的な会話能力の習得を目指した。

文法の授業では、基本的な日本語能力の拡充として、多様な日本語の文末表現の理解、習得を主な目標とした。

b．授業内容

会話の授業では、初めに表現の導入や練習を行わずまずやってみて力試しをする、というより現実の言語運用に近いスタイルをとっている山内博之『ロールプレイで学ぶ中級から上級への日本語会話』(2000年、アルク）を使用した。また、日本人チューターに協力をお願いした。このテキストの中から留学生が日本での生活で遭遇するであろうと思われる場面を扱った課を取り上げた。授業では、テキストの流れに沿って、まずロールプレイの内容に関連した話題を話し合い内容に対する関心を高めた。次に、ロールカード[20]の内容を理解した後、日本人チューターとペアを組み練習し、一組ずつ発表した。その際、会話を録音した。うまく言えなかったり、正確さを欠いたりした部分に対して、しかるべき表現や文型・単語などをフィードバックするために、その録音を使用した。さらに、会話能力の高い学生にはペア練習なしでロールプレイをさせたり、ロールの内容を少し変えたりして難易度に変化をつけた。次に、テキストの会話の流れに沿ってロールプレイの全体的な復習をした。そして最後に、特に重要であると思われる表現や単語の練習問題をした。

文法の授業では、多様な文末表現を扱った三吉礼子他『すぐに使える実践日本語シリーズ15複雑・微妙な意味を言い分ける助動詞（上級)』(2001年、専門教育出版）を使用した。各表現毎に意味、用法、接続の形を解説し、例文を読んでその言い分け方の理解を深め、その後で各自に例文を書かせ提出させた。10課毎にまとめのテストをして理解度をチェックした。また、外国人学習者が不得意とするカタカナ語も取り上げた。カタカナ語の学習には、佐々木瑞枝監修『よく使うカタカナ語　アカデミック・ジャパニーズ日本語表現ハンドブックシリーズ⑤』(2001年、アルク）を使用した。文法の授業毎に6問のディクテーションのテストを行なった。

c．評価と課題

会話では、場面が日常的なものであったこと、日本人チューターの協力があったこと、前もって準備する時間があったことなどにより、どのペアのロールプレイも概ねポイントを逃さずまとまっていた。

ただし、5名の受講生は日本語能力において同一レベルにはなかったので、表現や語の適切さ、文法の正確さ、発話のスムーズさなどにその差が見られた。また、事実や出来事を述べることはほぼ問題ないようだが、物事の説明や感情表現には適切な表現や語彙が不足していると思われた。初めは日本人チューターの使う友達言葉に戸惑いを見せていた受講生達も、回が進むにつれて徐々に慣れ、自分達でも適切に使えるようになっていった。特に文のつなぎ方、中断の仕方、文末の終助詞の使い方などに向上が見られた。また、日本人チューターのアドバイスやフィードバック時に指摘されたポイントを有効に生かしていた。それにより会話の自然さにも向上が見られた。

助動詞の学習では表現毎に各自に例文を書かせたが、意味理解や使い分けにはまだ時間が必要であることが分かった。また、文法や漢字の間違いもあり更なる日本語能力の補充

と拡充が必要である。

4）日本の文化

「日本の文化」は、③日本の文化、社会に関する一般的な常識の習得を目指すものである。本学の専任教員により、一般の授業と同じような形式で行われた。これは、実際に大学の授業を体験させることで、入学後の橋渡しとすることをも目的としている。

2005年春は、小林博教授が「金融の基礎知識」をテーマに、村井洋教授が「エクセルで作る北東アジア政治年表」をテーマに、井上厚史教授が「日本の文化」をテーマに授業を行った。

(4) 1、2年生に対して行われている留学生日本語

1、2年生に対する「留学生日本語」は、本学の外国人教員による授業と学外の日本語講師による授業の二種類が実施されている。

本学の外国人教員による授業は、中国人留学生に対しては中国人教員が、韓国人留学生に対しては韓国人教員が担当し、それぞれ独自に日本語指導を行っている[21]。一週間に2時間、春秋の各学期合計60時間実施されている。この授業は、同じ国出身の教員と話す機会を作っているものであり、日本語環境での生活により蓄積した、多くのストレスを解放する場にもなっているようである。

日本語講師による授業は、春学期は一週間6時間、合計90時間、秋学期は一週間4時間、合計60時間[22] 実施されている。

日本語講師による「留学生日本語」は、先に述べた①、②の能力を高めるために、次の二つの授業科目を中心にプログラムを進めている。本稿では、2005年度に実施された授業をもとに説明する。

1．アカデミック・ジャパニーズ	90時間	（春学期60時間、秋学期30時間）
2．文法・会話	60時間	（春学期30時間、秋学期30時間）
合　計	150時間	（春学期90時間、秋学期60時間）

2005年度は、「アカデミック・ジャパニーズ」は、佐藤りえこが担当し、「文法・会話」は、野上明子が担当した。10名の留学生が受講した。6名が中国人留学生、4名が韓国人留学生である。

1）アカデミック・ジャパニーズ

「アカデミック・ジャパニーズ」は、「入学前日本語研修」と同じく、②大学の授業を履修するために必要な日本語能力を習得させることを目的とする。「留学生日本語」では、レポート・論文を作成する能力を養成することを中心に授業を進めている。

a．到達目標

春・秋の両学期をかけて、アカデミック・スキルのうち「論文執筆力」を身に付けることを目指した。レポートを含む論文を書く技術は、入学後直ちに求められるからである。また、入学前日本語研修の課題である「読解力」を高めることも目標にした。大学の学術研究活動では、多量の文献を短期間に分析的に読み、情報を整理することが課されるためである。

b．実践内容

論文執筆力を身に付けるためには、まず論文そのものを知らなければならない。このため、論説文やレポート、報告文などの文章を読み、一般的な論文の構成や論理の展開パター

ンを分析した。次に、意見を述べる文と論拠を述べる文が論文の中で果たす役割を学び、実際に書き分けられるよう練習した。このほか、文献を引用する際の規則や方法、参考文献・図表・注の書き方など、論文を執筆する上で必要な技術を学んだ。おおむね授業時間の前半を文法事項・表現の解説に、後半を作文練習とその添削に当てた。

テキストは、1、2年の受講生が全員揃う授業[23]では、浜田麻理他『論文ワークブック』(2003年、くろしお出版)を使用し、1年生のみの授業では、二通信子他『留学生のための論理的な文章の書き方』(2004年、スリーエーネットワーク)の読解部分を使用した。

秋学期は、上記の論文作成の練習に加え、文章の要旨をまとめる要約作文を行った。評論文や新聞記事などを読み要旨をまとめる課題を出し、翌週、要約の例を示しながら解説を行った。

論文作成の技術は、授業時間に練習しただけで受講生に習得されるとは言い難い。論文記述力は実践を重ねることで徐々に身についていくものである。そこで、実際にレポートを書く際には、授業で使用したテキストを参考書として傍らに置き、例文を真似ることから始めるように指導した。

添削という教授法は、受講生が訂正された箇所を自分で分析し、文法上の誤りや不自然な表現、論理の飛躍など、自分の作文の「くせ」を見つけ、意識的にそれを直さない限り、その効果は高まらない。このため授業では添削箇所をできるだけ個別に説明するよう努めた。

c．評価と課題

論文作成の練習をとおして、レポートや論文では、話し言葉ではなく書き言葉を使用するということが受講生に定着した。また、引用や記号の使い方などには規則があることが意識できるようになった。さらに、論拠を示す、意見を述べる、図表を提示する時には、どのような表現を使わなければならないかがおおむね理解できたようだ。2年生の受講生の一人が「一年生の時に書いたレポートは(論文の書き方に即しておらず)いい加減だったと今、気がついた」と感想を述べているように、特に2年生は、前年度にレポートを書いた経験があるため、論文作成の具体的な方法がよりよく理解されたものと言える。

要約作文の結果から、具体例を含む部分は要約に加えない、指示語は元の語句に置き換えるなどの基本的な要約の規則は、半年で受講生に定着したといえる。また、要旨をまとめるだけでなく、複数のキーワードから的確な語彙を選択する力が身に付いた受講生もいたことは評価されるだろう。

さらに、1年生でも秋学期にはテキストを読むスピードが速くなり、短時間にまとまった文章が速読できるようになった。これは、「アカデミック・ジャパニーズ」の授業において分析的に読む練習を繰り返し行ったためだけでなく、他の日本語で行われる授業でも日本語の文献を読む機会が増え、学術的な文章を読むことに慣れてきたためであろう。しかし、要約以前に、原文における論理の展開が読み取れない、中心となる意見や主張、結論を捉えることができない、など一部の受講生の読解力の低さが課題として残された。

論文作成の練習や要約作文などの添削はできる限り個別に指導した。10名という受講生の数は授業の時間内で個別指導ができる数であった。受講生には日本語の個々の弱点もあわせて指摘することができた。しかし、論文の作成技術を指導する以外にも、文法の誤りや構文のずれなどを訂正しなければならないこともあり、時間をかけた十分なフィードバッ

クができたとは言い難かった。また、受講生の中には、「単位が出ないため、補習授業の予習・復習には時間を割きたくない」というムードがあり、返却された作文を見直す学生は限られていた。

これらのことから、論文記述力を身につけるためには、論文作成法の体系的な学習は言うまでもなく、長期的、継続的かつ自律的な受講生の取り組みと適切な作文指導が不可欠であると言えるだろう。

2）文法・会話

「文法・会話」の授業も、「入学前日本語研修」と同じく、①日本での生活に必要な日本語能力の拡充を目指すものである。「入学前日本語研修」における指導を継承するものである。日本語能力試験１級レベルの日本語能力を目指している。

a．到達目標

日本での生活に必要な日本語能力の補充と拡充を目標とした。

b．授業内容

会話は授業を進める中で交わされる教師と学生、または学生間の談話、質疑応答、意見交換の中に設定することとし、日本語の表現、語彙、文法を習得することを主として授業を進めた。使用したテキストは、小山恵美子、渡辺摂『すぐに使える実践日本語シリーズ４　広がる深まる副詞（上級）』(1993年、専門教育出版)、三吉礼子他『すぐに使える実践日本語シリーズ15　複雑・微妙な意味を言い分ける助動詞（上級）』(2001年、専門教育出版)、佐々木瑞枝監修『よく使うカタカナ語　アカデミックジャパニーズ日本語表現ハンドブックシリーズ⑤』(2001年、アルク）である。

授業の初めに前時のカタカナ語のディクテーションを行ない、正しく聞き取って書けるかをチェックした。テキストの用例を読み、カタカナ語の意味、そのカタカナ語がよく使われる表現や使われている文の理解を図った。また、カタカナ語やその関連語を話題にして意見交換をした。副詞の学習ではまず、章の始めの文を読みその章で学習する副詞の意味を推測し、一つ一つの副詞の学習に入った。副詞の意味を理解し例文を読んでその使い方の理解を図った。練習問題をして確認した後、文を作り提出させた。また、数章ごとのまとめの問題で復習し、理解を深めた。

助動詞は、入学前日本語研修からの学習を継続した。文末の表現は、中上級の学習者でさえ、時に曖昧で簡単な表現を好む傾向がある。より複雑で微妙な意味を含んだ表現を使い分けることができるようになる必要がある。授業では、まずその章にまとめられている各助動詞の意味や用法の理解を図った。特にその表現が使われる心的状況に注目した。接続の形を理解し、例文を読み、その使い方の理解を図った。その後、文を作らせ提出させた。

c．評価と課題

カタカナ語のディクテーションでは、復習して来る者もいて熱意をうかがわせた。主に濁音と長音に間違いが見られた。中上級の学習者にとって、語彙を増やすことは大きな課題であると考えられる。その意味で、カタカナ語や副詞の学習は有益であったと思われる。

副詞は面白いが難しいとの意見があったが、作文では適切で興味深い文も多く見られた。しかし、まとめの問題で一度にたくさんの副詞が出題されると、その使い分けが適切に出来ていないこともあった。しかしながら、会話や例文の中にカタカナ語や副詞を使おうと

いう努力、覚えようという努力に向上が見られた。

文末表現の使い分けは難しいと感じる者が多かった。それでも、作文するときに安易に終わらせていた文末に、積極的に既習した文末表現を使おうという姿勢が見て取られた。また、出来るだけ多くの例文を書こうという意欲的な姿勢も見られた。

しかし、作文では、文のつなぎ方や文末表現が十分に理解出来ていないために、不自然なものが見られた。

語彙面において、意味用法の理解は不十分であり、まだ学習時間が必要であり、繰り返しの学習も必要と思われる。語彙の獲得には大きな課題が残されている。

2．大学院の外国人留学生に対する日本語教育

2003年４月、島根県立大学に大学院北東アジア研究科（博士課程、５年（前期２年、後期３年））と開発研究科（修士課程、２年）が設置された。設置当初から、多くの外国人留学生を受け入れていたため、日本語教育が実施されている。大学院においては、多くは日本語で授業が行われているが、論文作成や口頭発表においては、英語を用いることが認められている。そのため、全ての留学生に日本語の十分な読解力や作文力が求められているわけではない。

大学院における日本語教育は、受講を希望する留学生に対して実施された。

(1)大学院の日本語教育の目的

大学院における日本語教育は、当然「島根県立大学大学院で学ぶための日本語能力の習得」を目的としている。基本的には、日本語の資料を読みこなす読解力と論文執筆のための作文力の習得を目指すものである。

(2)大学院の日本語教育の実践

日本語の資料を読みこなす読解力と論文執筆のための作文力の習得のために、「読解・作文」の授業が開設された。さらに、それを補充するために、特に作文力の増強のために、「文法・語彙」の授業が開設された[24]。本稿では、2005年度に実施された授業をもとに説明する。

１．読解・作文　　60時間（春学期30時間、秋学期30時間）
２．文法・語彙　　60時間（春学期30時間、秋学期30時間）
　　合　　計　120時間（春学期60時間、秋学期60時間）

2005年度は、「読解・作文」は井浦伊知郎が、「文法・語彙」は野上明子が担当した。

１)読解・作文

ａ．到達目標

大学院在籍中の留学生を対象として、学術的な文章を読んでその内容を理解し、その構成を分析して日本語で要約できること、また、読んだ文章を踏まえて自身の意見を日本語で書けるようになることを目指した。

ｂ．実践内容

当初は、アカデミックジャパニーズ研究会『大学・大学院留学生の日本語①読解編』(2001年、アルク）をテキストに輪読を進めたが、全員が充分に理解できるレベルの内容であることがわかったため、途中から同シリーズのアカデミックジャパニーズ研究会『大学・大学院留学生の日本語③論文読解編』(2002年、アルク）を併用し、後半は、こちら

が主となった。このシリーズは、重要単語に英語、中国語、韓国語の訳が付されており、中国・韓国出身者が多数を占める本クラスでは、非常に使いやすいテキストであった。輪読の後で、段落ごとの概要、中心文と支持文の配列などについて、口頭で質問、発言させ、文法の練習問題を解いた。文法事項の解説では、全員が日本語を相当程度読めることを考慮し、松岡弘監修『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』（2000年、スリーエーネットワーク）など、本来日本語教師用の参考書も利用して、理解を深めるようにした。

一方で、同シリーズのアカデミックジャパニーズ研究会『大学・大学院留学生の日本語④論文作成編』（2002年、アルク）および『大学生と留学生のための論文ワークブック』（1997年、くろしお出版）を用いて、実際に論文のための文章作成の練習を行った。ただし、実際にこの授業内で論文を完成させるには至らず、各受講生が現在手がけている研究論文やレポートの一部を持ち寄って全員で検討、添削する形式をとった。

c．評価と課題

大学院の留学生の場合、比較的高度な文章でも読もうと努力する姿勢が見られ、授業への参加意欲は総じて高かった。ただし、その中で読解力には若干の差があったため、常に全員のレベルに合った題材を提供することができたとは言い難い。微細な表現の差異にまで気付く受講生がいる一方、大まかな意味をとることに時間がかかる者もいた。後者の場合、詳細な文法解説は却って混乱を起こさせることもある。その一方、学部と異なり大学院では、日本語そのものについて丁寧に学び直せる機会が少なく、充分な日本語力を身につけられないまま入学してきた大学院生にとっては、こうした授業の場を通じてきめ細かい対応がかろうじてできているという側面もあるのではないか、と実感する場面が少なくなかった。

各自が手がけている論文を扱うことは、動機付けを高めるのには役立ったが、専攻分野が極端に異なっている場合、関心の差を生じる可能性があり、また実際には全員が課題を提出するには至らなかった。今後は、授業を進める中で共通のレポート課題をどのように提示し、作成を促していくかが課題となる。

2）文法・語彙

a．到達目標

論文作成に必要な日本語能力を拡充するための文法、語彙の習得を目指した。

b．授業内容

基本的な日本語能力は出身国で習得して来ることが期待されているので、中・上級レベルの文法的な機能語や語彙の習得を目指し授業を進めた。使用したテキストは、友松悦子他『どんな時どう使う日本語表現文型500』（1996年、アルク）と大矢根祐子他『完全マスター語彙日本語能力試験１・２級レベル』（2002年、スリーエーネットワーク）である。

機能語の学習では、各課の初めにある「力試し」をしてその課で学ぶことの基礎的な知識の程度を見た。その後、各機能語の意味をできるだけ易しい表現で説明した。さらに、それを使う場面、接続の仕方などを説明して、理解を図った。次に、例文を読んで、実際の文の中での使い方を確認した。できるだけ多くの例文に当たることが理解を深めると考えられるので、他の例文を書いたハンドアウトを作成し、配布した。例文で確認した後、その機能語を使って各自で文を作らせた。その課のまとめとして練習問題を行った。

語彙の学習では、問題文の意味や文中の語彙を確かめながら問題に当たった。また、問題文の中から話題を引き出し、話し合いを行った。

c．評価と課題

例年、主に中・上級レベルの留学生が授業を受けているが、本年度授業に参加した受講生の中には日本語レベルの低い学生がかなりいた。授業では、予習をして来る受講生も多くテキストの内容や問題、作文に積極的に取り組んだ。しかし、作文では初級文型が定着しておらず、また語彙が不足しているため、的確な文が作れない学生が多かった。また、発話や音読がたどたどしい学生もいた。ただし、いずれの受講生も授業に対する強い熱意を持っており、積極的にコミュニケーションを図ろうという姿勢が見られた。これにより、本年度末にはコミュニケーション運用能力にかなりの向上が見られた。

大学院の日本語補講を受講する留学生のレベルは、年々低くなっているように思われる。今年のように初級さえ十分に学習していない学生が授業に参加してくると、レベルの設定が不明瞭にならざるを得ず、授業を円滑に行なうことさえ難しくなる。

そのため、初級レベルの学生が多い年度には初級コースを設けるか、または、現在行なっている講座を初級レベルと明確に位置づける必要性も出てくるのではないかと考えられる。

なお、初級レベルの大学院留学生合計５名に対して日本語ボランティアグループ「マリントークの会」（会長：野上明子）が日本語学習支援を行なった。期間は2005年７月12日～９月30日及び10月11日～12月９日で、毎週月曜日から金曜日、一コマ90分（総コマ数79回）の授業を「マリントークの会」会員の橋が迫劭、前木一喜、永見桃千代、溝渕恵、野上明子の５名が日替わりで受け持った。また、この期間中、遅く来日した２名の学生に対しては、８月８日～９月２日、別枠で指導した。使用したテキストは、（a）東京外国語大学留学生日本語センター編著『実力日本語上・下』（1999–2000年、アルク）、（b）山岡千弘、山谷陽子『項目別日本語文法問題集初中級用Ⅲ』（1991年、凡人社）である。授業は主に（a）のテキストで進めた。テキストに沿ってまず代表的な文型例文の解説をし、文法項目が細かく展開されている文型練習をし、最後に会話の練習を行なった。そして「読み物」を宿題にした。（a）のテキストが終わったあと、（b）のテキストを使用して、（a）の拡充を図った[25]。

このような支援がなかったら、初級レベルの学生たちは、未だに日本語の基礎も系統的に学習できていなかったのではないかと思われる。大学院の日本語教育における大きな課題であると考える。

3．課題

本学総合政策学部と大学院における日本語教育の必要性については、全学的なコンセンサスを得ている。また、受講する外国人留学生も日本語教育の必要性を認識し、各授業についても満足しているようである。しかし、いくつかの問題点がある。

第一に、総合政策学部における「入学前日本語研修」、「留学生日本語」のいずれのプログラムも、「補講」に位置づけられ、正式の授業ではなく、単位も与えられていない。「入学前日本語研修」については、入学前に実施されるため、単位を与えることに無理があることは理解できるが、「留学生日本語」はかなり高度な内容を指導していること、留学生に対する日本語の授業が多くの大学において単位を与えることができる正規の授業となっ

ていること、などから、「留学生日本語」を正規の授業とし、受講した留学生に対して単位を与えることを検討すべきである[26]。

第二に、日本語教育を担当する専任教員がいないことである。本学における日本語教育の方針・計画の策定、具体的なプログラムのコーディネイト、実際に指導などを進めていくためには、日本語教育に関する専門的な知識と経験を持った専任の教員が必要である。本学がその国際性を重視する大学であるならば、今後多くの留学生が受け入れられるように努力しなければならず、そのためには、本学における日本語教育の充実が是非とも必要になってくるであろう。教員の配置は、様々な問題を伴うが、国際性豊かな大学を目指すためには、検討に値するものであると考える。

第三に、本学では、留学生委員会と事務局の留学生センターが、留学生に対する日本語教育を担当し、主に本学の外国人教員と学外の日本語講師が授業を実施している。しかし、外国人留学生にとって日本語で行われている授業は、その内容にかかわらず、「日本語」の授業であると言える。そのような意味でも、本学教員全体が日本語教育に対して十分な理解を持ち、留学生への指導を行っていく必要があると考える。今後、外国人留学生に対する日本語教育を、全学的な取り組みとしていかなければならないと考える。

第四に、大学院の授業では、受講する留学生の日本語のレベルの差異が大変大きい。本来、日本語能力が中級・上級レベルの留学生を対象としていた。しかし、日本語能力が初級レベルの留学生が多数受講するようになった。これは、大学院の日本語教育において想定されていない事態である。大学院教育における日本語能力の要求レベルを明確にした上で、大学院の日本語教育の目的を再検討し、必要によっては、初級レベルのクラスの開設を考える必要がある。

第五に、学部と大学院の授業の連携が必ずしも十分ではない。学部の日本語教育と大学院の日本語教育は一部重なる部分がある。そこで、大学院の留学生が学部の日本語の授業を受講すること、学部の留学生が大学院の日本語の授業を受講することを検討する必要がある。たとえば、学部の留学生が受講する入学前日本語研修に大学院の留学生を受講させることなどが考えられる。

第一、第二の問題は、本学の教育方針に関わる大きな問題であり、日本語教育担当者だけで解決できる問題ではない。第三の問題は、本学教員に広く呼びかけ、協力を求めていくことにより、解決できるであろう。第四の問題は、新しいクラスの開設に関わる問題であり、大学側に求めていく必要があるだろう。第五の問題は、日本語教育担当の教員間で更に検討を進める必要がある。

終わりに

本学総合政策学部において、外国人留学生にいかに効果的に日本語教育を行うかという問題に対して、６年間の教育実践を通して、かなり明確な解決法を提示できたものと考えている。

一方、大学院における日本語教育の問題点が、明らかになってきた。その問題は、主に受講生の日本語能力が中級レベルであることを想定して開設された授業を、初級レベルの学生が受講していることに起因する。この問題の解決のために更なる研究が必要であろう。

また、本稿では、ほとんど触れなかったが、コスト（費用）も大きな問題である。コス

ト面を考慮に入れた上で、より効果的、効率的に日本語教育を進める必要がある。

外国人留学生に対する日本語教育は、本学の留学生受入れのための必要な条件である。本学が国際性豊かな大学を目指すのであれば、積極的な留学生受入れを考えていかなければならず、留学生のためのカリキュラム設定において、日本語教育の拡充を検討しなければならない。日本語教育の本学における重要性は、益々大きくなるものと考える。

注

1）本稿は2005年12月10日島根県立大学で「語学教育の実践と教室内コミュニケーション」をテーマに開催された「島根県立大学・蔚山大学校共同シンポジウム」において犬塚優司が発表した内容に、野上明子、佐藤りえこ、井浦伊知郎の原稿を加え、加筆修正を加えたものである。

2）以下「本学」という。

3）外国人留学生数の推移については次の表の通りである。

学部留学生

年度	出身国・地域		合計
	中国	韓国	
2000	2	2	4
2001	4	4	8
2002	6	6	12
2003	9	8	17
2004	11	8	19
2005	12	8	20

大学院留学生

年度	出身国・地域					合計
	中国	韓国	ロシア	台湾	ブラジル	
2003	9	2	1	0	0	12
2004	13	5	1	0	0	19
2005	14	5	1	1	1	22

4）本学においては、教員を中心に組織されている留学生委員会と事務局の留学生センターが日本語教育実施について、担当している。

5）このほかに2004年度にはウルサン大学からの短期日本語研修を受け入れているが、本稿では対象とはしない。

6）詳しくは、犬塚、佐藤（2005）参照。

7）これら三つの地方自治体からの留学生を「交流県留学生」という。

8）島根県が定めた「島根県立大学交流県留学生受入要項」第15条に「交流県の知事等は、入学許可後入学までの期間に、交流県留学生を対象として充分な日本語教育研修を実施するものとする。」とある。なお、「交流県の知事等」とは「中華人民共和国吉林省省長、寧夏回族自治区主席及び大韓民国慶尚北道知事」（「島根県立大学交流県留学生受入要項」第6条）のことである。

9）松田（2002）参照。

10）松田（2003）参照。
11）犬塚、佐藤（2005）参照。
12）詳しくは、犬塚、佐藤（2005）参照。
13）プレースメント試験、実力試験、発表会を含む。
14）舘岡（2002）参照。
15）以下、「ゼミ」という。
16）これは、散骨をテーマにしたテキストで、受講生が日本での伝統的な葬送の習慣や新しい葬送の方法を学ぶとともに、母国での葬送と比較しながら読めるものである。
17）島根県立大学では、留学生に対して学習上の援助及び生活上の指導のために、本学学生を「チューター」に任命している。
18）図書館とコンピュータ演習室を中心とする施設である。
19）なお、発表会に参加した先輩留学生の一人が、「私が研修で学んだこと（＝口頭発表の技術）が、２年生になって初めて（自分の研究活動に）役に立つのが分かった」とコメントしていた。これは研修で「アカデミック・ジャパニーズ」を学ぶことの意義を簡潔に表しており、受講生たちはこの言葉に大いに励まされていたようだ。
20）学習者に役割（ロール）を説明するカードである。
21）2005年度は韓国人教員がいないため、中国人教員により実施されている。
22）2005年度は担当講師と時間割の都合で50時間となっている。
23）２時間の授業が週（秋学期は隔週）に２回実施されたが、そのうち１回は１、２年生が出席し、１回は１年生のみが出席した。
24）このほかに、初級レベルの留学生のために、ボランティア講師による授業が行われていた。
25）ボランティア講師に対して、本学宇野重昭学長より感謝状が贈られた。
26）2007年度からのカリキュラム改訂案において、日本語科目を留学生のための正規の授業として開設することが検討されている。

参考文献

アジア学生文化協会（1997）『日本語能力試験文法問題対策　２級』（スリーエーネットワーク）
グループ・ジャマシイ編著（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』（くろしお出版）
平高史也（2002）「外国語教育学の確立に向けて」（平高史也、古石篤子、山本純一（2002）pp. 52–66）
平高史也、古石篤子、山本純一（2002）『外国語教育のリ・デザイン—慶應 SFC の現場から—』（慶應義塾大学出版会）
犬塚優司、佐藤りえこ（2005）「島根県立大学における入学前日本語教育—「島根県立大学交流県留学生日本語研修2003」の報告と評価—」（島根県立大学総合政策学会編『総合政策論叢』Vol. 9，pp. 53–84）
松田みゆき（2003）「島根県立大学交流県留学生への“橋渡し教育”の試み—「第２回島根県立大学交流県留学生松江日本語研修」報告—」（島根県立大学メディアセンター編『メディアセンター年報』Vol. 3，pp. 64–88）
松田みゆき（2002）「島根県立大学交流県留学生への日本語教育の必要性と今後の課題—「島根県立大学交流県留学生松江日本語研修」報告—」（島根県立大学総合政策学会編『総合政策論叢』Vol. 3，pp. 93–120）
松岡弘監修（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』（スリーエーネットワー

ク）
白川博之監修（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』（スリーエーネットワーク）
舘岡洋子（2002）「日本語でのアカデミック・スキルの要請と自律的学習」（東海大学編『東海大学紀要　留学生教育センター』第22号，pp. 2−3）
植木　香、植田幸子、野口和美（2005）『完全マスター１級日本語能力試験文法問題対策　改訂版』（スリーエーネットワーク）
山田しげみ（1996）「日本語能力を伸ばすための要約指導」（日本教育学会編『日本語教育』No. 89, pp. 144−155）

使用教科書等一覧

１．総合政策学部の外国人留学生に対する日本語教育

Ａ．入学前日本語研修

１）アカデミック・ジャパニーズ

安田睦彦『お墓がないと死ねませんか』（岩波ブックレット NO. 262）（1992年、岩波書店）

産能短期大学『研究発表の方法――留学生と日本人学生のためのレポート作成・口頭発表の準備の手引き』（2001年、凡人社）

ピロッタ丸山他『留学生のための大学の授業へのパスポート』（2000年、凡人社）

２）聴解・読解

宮城幸枝、三井昭子、牧野恵子『毎日の聞きとり plus40』（上下）（2003年、凡人社）

佐々木瑞恵、岳肩志江『予測して読む聴読解』（2001年、アルク）

アカデミックジャパニーズ研究会『大学・大学院留学生の日本語①読解編』（2001年、アルク）

アカデミックジャパニーズ研究会『大学・大学院留学生の日本語③論文読解編』（2002年、アルク）

３）文法・会話

山内博之『ロールプレイで学ぶ中級から上級への日本語会話』（2000年、アルク）

三吉礼子他『すぐに使える実践日本語シリーズ15複雑・微妙な意味を言い分ける助動詞（上級）』（2001年、専門教育出版）

佐々木瑞枝監修『よく使うカタカナ語　アカデミック・ジャパニーズ日本語表現ハンドブックシリーズ⑤』（2001年、アルク）

Ｂ．1、２年生に対して行われている留学生日本語

１）アカデミック・ジャパニーズ

浜田麻理他『論文ワークブック』（2003年、くろしお出版）

二通信子他『留学生のための論理的な文章の書き方』（2004年、スリーエーネットワーク）

２）文法・会話

小山恵美子、渡辺摂『すぐに使える実践日本語シリーズ４　広がる深まる副詞（上級）』（1993年、専門教育出版）

三吉礼子他『すぐに使える実践日本語シリーズ15　複雑・微妙な意味を言い分ける助動詞（上級）』（2001年、専門教育出版）

佐々木瑞枝監修『よく使うカタカナ語　アカデミックジャパニーズ日本語表現ハンドブックシリーズ⑤』（2001年、アルク）

2．大学院の外国人留学生に対する日本語教育

1）読解・作文

アカデミックジャパニーズ研究会『大学・大学院留学生の日本語①読解編』（2001年、アルク）

アカデミックジャパニーズ研究会『大学・大学院留学生の日本語③論文読解編』（2002年、アルク）

松岡弘監修『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』（2000年、スリーエーネットワーク）

アカデミックジャパニーズ研究会『大学・大学院留学生の日本語④論文作成編』（2002年、アルク）

浜田麻理他『大学生と留学生のための論文ワークブック』（1997年、くろしお出版）

2）文法・語彙

友松悦子他『どんな時どう使う日本語表現文型500』（1996年、アルク）

大矢根祐子他『完全マスター語彙日本語能力試験１・２級レベル』（2002年、スリーエーネットワーク）

3）日本語学習支援

東京外国語大学留学生日本語センター編著『実力日本語上・下』（1999−2000年、アルク）

山岡千弘、山谷陽子『項目別日本語文法問題集初中級用Ⅲ』（1991年、凡人社）

キーワード：日本語教育　アカデミックジャパニーズ　留学生

（INUZUKA Yuji, NOGAMI Akiko, SATO Rieko and IURA Ichiro）